東京オリンピック･パラリンピックに向けて　－7 年後の日本のあるべき姿－

井澤　誠

１．はじめに

本年９月８日に開催された IOC 総会は、2020 年夏季オリンピック・パラリンピック開催を目指す東京にとって、最終審判が下される極めて重要な会議となった。

選考の最終プレゼンテーションで東京は、高円宮妃久子様や安倍晋三首相、ニュースキャスターの滝川クリステルさんなど重厚多彩な顔ぶれを揃え、壇上から東京の魅力を訴えた。どのプレゼンターも身振り手振りを交え、笑顔とユーモアを絶やさず、聞く者を存分に惹きつけた。

一般に日本人はプレゼンが苦手とされてきたが、今回はそんな前評判を見事に裏切り、むしろプレゼンの成功が東京を勝利に導いたとさえ言える。

これから７年。世界が注目する東京オリンピックを成功させるために、私たちがなすべきことは何か。その答えもまた、プレゼンの内容やそれに対する世界の期待のなかに凝縮されている。

それは大きく分け、三つの論点に集約できよう。第一に東日本大震災からの真の復興、第二に世界の人々を迎え入れる「おもてなし」の心の醸成、第三に日本の技術力や組織力をいかした安心安全な国づくりである。無論この前提として、施設や社会インフラ整備、実行組織の円滑な運営など基礎的な準備が必要なのは言うまでもない。

以下では各論点の課題とあるべき姿の具体像を述べる。

２．第一の論点　震災からの復興

プレゼンの冒頭で久子様は、東日本大震災に際しての各国や IOC の支援について触れ、国を代表して感謝の意を述べられた。震災では 190 を超す国や地域、また多数の国際機関から様々な支援を頂いた。これは我が国が長年に渡り、世界各国と信頼を積み重ねてきたことの証左であり、日本の国際貢献に対する各国からの感謝の表れでもあった。私たちはこのような厚意に対し、被災地の復興と大会の成功を達成することで恩返しをしていく必要がある。

日本には古くから「贈り物」の風習がある。これは感謝の気持ちをモノに込めて贈り、相手もまたお礼の気持ちを込めてお返しをする行為である。復興と大会の成功はこのような習慣・礼節にも通じ、支援への感謝を形として表すものである。

しかしながら被災地の復興は必ずしも順調ではない。私も昨年ボランティアで何度か被災地を訪れたが、震災後２年近くを過ぎても復興は道半ばであった。瓦礫は片付いているものの、今後どのような街づくりを目指していくべきか、そこに住む人々自身が方向性を見出せていないように思えた。その姿は、かつて震度７の大地震に見舞われ多大な犠牲を

出しながらも、短期間で見事に復興を果たした神戸やその周辺地域に比べると極めて対照的であった。

しかし被災地の復興は大会成功の大前提である。同じ国内で、方やオリンピックの熱に沸きながら、かたや震災を乗り越えられずにいるようでは、成功とは程遠い。各国の厚意を無為にしないためにも復興を確実なものとし、全国民の手で大会を成功させたい。

他方で原子力発電所事故への対処については、世界からいまだに厳しい目が向けられている。複数の国では日本の食品に対する輸入制限や検査体制の強化が続けられており、また国連からは健康検査体制の強化や積極的な情報公開を求める勧告がなされた。これらは各国が日本の危機対応能力に疑問符をつけていることを示している。

プレゼンで安倍首相は福島原発の状況について触れ、「The situation is under control(状況は制御されている)」と断言した。この言葉を真に裏付けるためにも、私たちはあらゆる知恵と技術を結集させていかなければならない。

３．第二の論点　おもてなしの心の醸成

滝川クリステルさんは、日本の精神様式を「おもてなし」という言葉で端的に示し、印象的なジェスチャーで審査員に訴えた。このおもてなしこそ、東京オリンピックを最も特徴づけ、来訪者に日本の魅力を伝える源泉である。おもてなしの本質には、他者への尊敬の念、好意の表明、気配り・心配りなどの思想がある。滝川さんの言葉を借りれば、この精神は先祖代々受け継がれ、時代を超えて日本に深く根付いている。私たちはこの国に生まれ育ち、親兄弟をはじめ多くの人と関わる中で、このような態度を自然に身につけてきた。決して教科書で教えられるものではなく、ましてマニュアルで複製･再現できるものでない。この精神は、諸外国が簡単には真似できない特質であり、日本の大きな強みである。

他方で日本人がこの強みを十分に認識し、対外的に発信できているかというと実に心もとない。確かに今回のプレゼンはすばらしかったが、全ての日本人が説明上手・発信上手なわけではない。日本の伝統的性向として、多くは語らず黙々と仕事をする態度を良しとしてきた。特に私が住むような地方部では、その傾向が今でも根強く残る。

しかし、こと対外的な発信となると変革の余地が大いにある。さりげない心配りは至高の美徳であるが、まったく気付かれなければ意味をなさない。これからの７年間を見据えるとき、日本の強みをブラッシュアップし、外から見ても分かりやすく来訪者の心に直に響くサービスに仕立て上げる必要がある。

４．第三の論点　安心安全な国づくり

ここでいう安心安全とは、治安や防犯だけでなく、交通インフラの運用、医療サービスの提供、施設の耐震、防災・減災力向上、さらには国家の安全保障まで広い範囲を包含する。要するに外国人が心配なく日本を訪問できるような環境作りである。

この点に関しては、猪瀬都知事ほか複数のプレゼンターが言及しているように、東京は

現在でも世界で最も安全な都市の一つである。これは規律正しく真面目な国民性と、警察や行政、企業など優秀な組織の賜物である。

しかしいくら有能な警察組織といえども、近年のサイバー犯罪やテロ対策には手を焼いている。また高度成長期に整備した施設・道路・橋梁などが一斉に老朽化し対策が急務となっている。このような現実に対し、限りある時間や財源を効果的にやり繰りすることで、東京を将来の社会変動を見据えた新しい国際都市にリメイクしていく必要がある。

５．結び　私たちにとってオリンピックとは

最後に、このオリンピックが私たち日本人にとってどのような意味を持つのか、また意味あるものとするには何が必要かを述べる。

一言で表すと、日本人としての自信と誇りを取り戻すこと、に尽きる。

近代史を振り返れば、東洋の弱小国としてスタートした我が国は、明治維新以降、西欧列強に伍すべくあらゆる努力を重ね、戦前には有色人種で唯一の近代国家となった。先の戦争では不幸にも敗戦の憂き目を見たが、戦後は経済復興にまい進し、世界で有数の経済大国となった。またこの間にアジアで初めてオリンピック開催地となり、その後に続くソウル、北京のリーディングモデルとなった。

昨今では新興国の追い上げに直面しているが、自動車や産業機械を中心に「メイドインジャパン」は今でも高品質の代名詞である。また国際貢献の場面でも政府開発援助をはじめ世界高水準の支援を続けている。

しかし残念なことに、それらに見合う国際的な地位やプレゼンスを得ているとは言い難い。敗戦国のレッテルが足かせとなり、日本が国際的地位を高めようと努力するたびに、一部の国から批判をあびるなど壁に直面する。それがまた、日本人自身にも跳ね返り自信を失わせている。戦後半世紀を過ぎても自主憲法を制定できないこと、「戦前の日本人は悪いことをした」という風な歴史教育がいまだ続き、少なくない日本人がそれを信じていること、などは戦後の日本人の自信のなさの表れである。言い換えると、これだけ豊かになった現在でも私たちは、「米国はこうだ」「北欧はこうだ」「周辺諸国は反対している」と外に価値判断の基準を求めてしまい、生き方の機軸を自分で定めることができないでいる。

しかし憲法前文に掲げられるように、国際社会で名誉ある地位を占めようとするならば、流暢な英会話の習得よりも（無論それも必要だが）、自らのルーツをしっかりと認識し、先人が築いた歴史に思いを馳せ、日本人であることに愛着と誇りをもつことのほうが優先である。そして借り物でない自分の言葉で日本の価値観を発信していくことである。自らの国や郷土を大切にして初めて、他国からの尊敬を受けることができる。

思えば日本には「おもてなし」のほかにも、世界に類を見ない特色がふんだんにある。例を挙げるなら、繊細で四季の移ろい豊かな自然、精巧な木造建築や機械装置の技術、素材の味をいかした食文化、情景や感情の語彙が豊富な日本語、わびさび・粋・間などの精神価値等々、特殊性・固有性には事欠かない。これらはいずれも、大陸の影響を受けつつ

日本人の手で独自に進化させてきたものである。

　オリンピック開催は、私たち自身がこれら日本文化をもう一度見つめ直し、その質の高さとかけがえのなさを再認識する機会である。世界中の人々が訪れるこの桧舞台で臆することなく、私たちの価値観と生き方を堂々と発信していこうではないか。